

資料3

そして・・・

1985年3月17日、イラン・イラク戦争の時にイラク政府が『イラン上空を飛ぶすべての航空機、民間だろうと関係なく3月19日午後8時（日本時間20日午前2時）以降、つまり48時間後からは撃ち落とす可能性がある』と言いました。政情不安のために就航が打ち切られていた日本航空にも救援機を出すよう求められていましたが、安全が保障されないので出せませんでした。どうにか18日になって日本航空のジャンボ機が成田空港に準備されたのですが、派遣中止になってしまいました。テヘランに残された日本人は200名以上、タイムリミットが刻一刻と迫ってきました……。

「タイムリミットまであと少し、みんなだめかと思っていた時、2機の飛行機が乗り込んできました。それがトルコ航空の飛行機だったのです。215人中198人の日本人が1機目に、17人は2機目に助けられました。残り時間はほとんどありませんでした。

この時、日本政府からの救援要請が世界各国に届くがどの国も自国民の救援を優先するため拒否されていた中、静かに動き出していた国があった。トルコ政府である。追撃される可能性もある中で救援の飛行機の派遣、しかし首相、関係者はこう考えていた。「危険を冒してでも日本人を救出する。……………」

資料4

「タイムリミットまであと少し、みんなだめかと思っていた時、2機の飛行機が乗り込んできました。それがトルコ航空の飛行機だったのです。215人中198人の日本人が1機目に、17人は2機目に助けられました。残り時間はほとんどありませんでした。

この時、日本政府からの救援要請が世界各国に届くがどの国も自国民の救援を優先するため拒否されていた中、静かに動き出していた国があった。トルコ政府である。追撃される可能性もある中で救援の飛行機の派遣、しかし首相、関係者はこう考えていた。「危険を冒してでも日本人を救出する。わが国にできる日本への恩返しだ。人間である限り、エルトゥールル号の恩は決して忘れない。友よ、心配するな。」

トルコ政府が会議をしている間に、この命がけの飛行に志願したパイロット、飛行機の整備をする整備員は瞳を輝かせて準備に励んだ。その心にあつたものは、

「この手で整備した航空機が日本人を助けるなんて夢のようだ。」

「昔、父親に言われた。日本が助けを求めることがあったら最初に駆けつけるのはトルコなんだ。」

「学校の教科書でも先生にも、親にも言われた。その時がついに来たんだ。」

その時、イラン国内の空港では脱出を待つトルコ人600名と、絶望の淵にたたき込まれている日本人200余名にトルコ政府から連絡が入る。「航空機は2機やってくる。1機に乗れる定員は250名。」脱出を待つトルコ人と日本人を合わせると800人、航空機2機の定員は500名。……全員乗ることができない状況であった。トルコ政府は事実を告げた。

「1機はあなたたちが乗り込む権利がある。だが、もう1機はここにいる日本人を救出させるための1機です。」

しばらくの沈黙の後、トルコ人から声が上がった。「みんなも親や先生から幾度となく聞かされただろう、エルトゥールル号の話。日本とトルコの過去の100年を胸に、未来の100年のために、誇りを持って日本人に乗ってもらおう。」

乗れない者はどうするのかという声も上がったが、すぐに「歩けが悪いじゃないか。」の声に包まれた。イランとトルコの国境は接しているからである。

「元親れば、車で3～5日でトルコだ。アララト山を越えれば故郷が待っている。大地の続く限り、たどり着けない所はない。俺たちには足がある。歩こう！」つらそうに視線を落としている日本人に告げた。

「飛行機に乗れ。そして生きろ！」

トルコ国民のおかげで陸路、空路で全員が無事脱出できた。

トルコが助けに来てくれた理由は95年前（1985年のその当時から）の遭難事故のお礼でした。ビルセル大使はこう伝えました。『トルコと日本は、エルトゥールル号の時から、友情のきずなで結ばれてきました。私たちは、あの時、日本の人たちから受けた真心を、みんなが胸に刻んでいます。トルコの子どもたちは、そのことを、学校で教えられています』と。